改作のあとさき ――『下谷のはなし』から『下谷叢話』へ――

福井辰彦

はじめに

そもそも何の障害もなくすんなりと書き上げられる文学作品などありはしないであろうが、荷風の史伝小説『下谷叢話』が経た紆余曲折はやはり特別のもののように思われる(一)。

大正十二年、荷風は『澁江抽斎』、『伊沢蘭軒』といった鷗外史伝小説に触発され、七月二十七日の『断腸亭日乗』に、「毅堂鷲津先生の事蹟を考證せんと欲す。(二)」と記す。これが『下谷叢話』のそもそもの出発点である。この後約一月の調査ののち、『日乗』八月三十一日条には、「終日鷲津先生事蹟考證の資料を整理す。晩餐の後始めて考證の稾を起す。」と記すにいたる。しかし、その翌日九月一日は大震災が東京を襲った日である。当然執筆は中断される。そして『日乗』十一月三日条には改めて、「鷲津毅堂大沼枕山二家の伝を起草す。題して下谷のはなしとなす。」と記す。『下谷叢話』の初出にあたる『下谷のはなし』である。これは翌大正十三年二月から七月にかけて雑誌『女性』に掲載される。

ところが、『日乗』大正十三年五月五日条には、

尾州丹羽の鷲津順光翁父祖四世の詩文藁を郵送せらる。之を読むに、余が下谷のはなしの前半は改作の必要なるを知る。

と記し、『下谷のはなし』は「三十五」、慶応三年で中断される。ここから大幅な修訂・増補がなされ、大正十四年二月十七日脱稿(三)、同十五年三月二十日刊行されたのが、初版にあたる春陽堂版『下谷叢話』である。

この後荷風は、昭和十四年十一月二十八日刊冨山房版『下谷叢話』、昭和二十五年八月二十五日刊中央公論社(改訂)

版『荷風全集』第十三巻所収『下谷叢話』と二度にわたり修訂・増補を重ねてゆく。しかし、『下谷叢話』のおおよその形が固まるのは『下谷のはなし』から春陽堂版『下谷叢話』への改作によってである。

一

この『下谷のはなし』から春陽堂版『下谷叢話』（以下単に『下谷叢話』と表記する場合、春陽堂版を指すものとする。）への改作についての先行研究には、竹盛天雄「『下谷叢話』縁起――初出から改作へのすじみち――」（『文学』一九六五・九）と前田愛「荷風における江戸――『下谷叢話』をめぐって――」（『国文学』一九七〇・六）がある。

竹盛氏は、『下谷のはなし』において荷風は、枕山に自身の境涯・思想・趣味を重ね合わせることで、自己主張を行っており、そのために性急で主情的な表現がしばしば見られるとする。

竹盛氏が挙げる例のうち三個所を見てみる。「九」では枕山の「三田薬王寺に先君子竹渓先生の墓を展した五言古詩一篇」の「鎮年走道途。無暇奉祭祀。地下若有知。豈謂克家子。惟有詩癖同。家声誓不墜。」という個所を引き、

> 枕山はこの誓言に背かず決して家声を墜さなかつた。家声は枕山のために却て揚つたのである。わたしは若し枕山が無かつたならば其父竹渓の詩名は夙に忘れられてしまつたと云ふを憚らない。

と述べる。枕山がいなければ、竹渓は忘れられただろうというのは言い過ぎであり、改作後は「家声は枕山のために」以下の部分は削除される。しかし、こうしたやや過剰な記述からは、永井家の嫡男としての役割を放棄した〈不肖の子〉荷風の悔恨が読み取れる。また、「十八」の枕山についての次のような記述は、荷風自身についての評言としても読み得る。

> 此年新春の諸作に見るに枕山は頻に自家の本領の唯詩をつくるに在つて仕官を欲せず名声を喜ばざる事を述べてゐる。これは決して文字の遊戯ではない。枕山の常に閑散自適の生涯を欲してゐた事は時に従ひ物に会ふ毎に其の作中に云はれてある。

この年七月枕山は両国の川開を見て異常なる感興を覚えたと見え、「両国観」烟火戯」歌」に二百二十四字を費してゐる。（中略）こゝに歌は一転化して京都鴨川夜涼の景を論じ出し「地雖」佳麗」太偪狭。辣酒鮮肉到頭乏。」となし其の遂に東都両国の非にあらざる事

を云ひ、「烟火夜夜舟日々。両国繁華天下無。」と断言を下した。枕山は飽くまで武江享楽の詩人である。嘗て赤羽橋に立つて服部南郭を憶ひ元禄享保の風流を追想したのも偶然でない。近世儒家の中寺門静軒、大沼枕山、成嶋柳北の三家は大田南畝に継ぐべき江戸純粋の文人と称すべきであらう。

一方、鷲津毅堂について語ることは、先祖を顕彰し、追慕することであり、現実政治に身を投じた毅堂の生臭さ、俗物性は、血縁としての親愛感から不問に付されているとする。

改作については、新資料入手によってその必要が生じたものとする。改作の結果、間接的資料からの推測が、一次資料に置き換えられるなど記述が整理され、右に引いたような主観的記述も減少していることを指摘。史伝としての形式は整えられたが、改作前に見られた作者と作品世界との緊張感や、追尋の迫真感は薄まっていると評する。しかし、枕山・毅堂の評価・位置付けは改作前後で変化はないと論じる。

これに対して前田氏は、改作により追加された第三十六、明治元年以降について、第四十に引かれている中根香亭『天王寺大懺悔』が毅堂の俗物ぶりを揶揄した内容であることに着目。新政府の官僚となった毅堂に対する荷風の違和感・反発が表れているのだとする。また、官僚としてどちらかといえば不遇であった毅堂の憂悶について言及しないことや、第三十七で登米県着任時の毅堂の訓示を引いた後、一言もコメントを加えないことも、毅堂に対する皮肉な視線を反映したものであると述べる。多くの下谷文人たちの死が語られる中で、森春濤の死についてまったく触れないことも、明治政府高官との関係を利用して成功した春濤に対する批評を含んでおり、毅堂における省筆と同性質だともいう。そして改作は、資料の収集・検討を進めるうち毅堂の官僚的俗物性が覆い切れなくなった結果なされたものであると結論付けている。

改作の動機と毅堂の評価・位置付けについて、両氏の見解は異なっているのである。

本稿では、この点も含め、改めて『下谷のはなし』改作の意味を考える。

二

まず、『下谷のはなし』、『下谷叢話』両作の冒頭部分を比較することから考察を始めよう。以下主な異同を列挙する。

①最初の段落はほぼ同文で、弟誕生の際、下谷の祖母の家すなわち鷲津家に預けられたこと、当時のことは『下谷の家』（明治四十四年二月、『三田文学』に掲載。）に書いたことを述べる。

この後『下谷のはなし』は、

下谷の家は今年九月一日、東京市の大半を灰にした震後の火に焼亡した。其の在りし処は竹町四番地である。いつも露店の賑であつた三味線堀の通から左へ折れる横町で、生駒の金毘羅といふ小祠と其の塀を連ねた曲角に土蔵の立つてゐた屋敷であつた。

と続き、明治四年以来その地に住んだ鷲津家は、近傍でも古い家であったと述べる。

これに対し、『下谷叢話』の第二段落は、

下谷の家は去年癸亥九月の一日東京市の大半を灰にした震後の火に焼亡した。わたくしがこゝに下谷叢話と題して下谷の家の旧事を記述しやうと思立つたのは之によつて聊災禍の悲しみを慰めやうとするの意に他ならない。下谷の家はわたくしの外祖父なる毅堂鷲津先生の明治四年の春こゝに居を卜されてより五十有二年にして烏有となつた。其日下谷の家にはわたくしの伯父母と軈て其後を嗣ぐべきわたくしの弟貞二郎と其妻および児女三人が住んでゐた。幸にして老幼一家皆恙なく、相扶けて難を上野公園に避けたのである。

と続く。

②次に両作とも鷲津家の家系、鷲津幽林の伝と続く。『下谷のはなし』では『尾張名所図会』、鷲津家の系図・口碑、『五山堂詩話』、『毅堂丙集』、『伊沢蘭軒』、『先哲叢談』などを参照しつつも、決定的な資料を欠くため、あれこれと推測を重ねる。一方、『下谷叢話』は幽林の行状、『幽林先生遺稿』などを新たに得たため、これらの引用を中心に記述が整理されている。

③次に大沼竹渓についての記述が続く。『下谷のはなし』では、鷲津家の家系をたどる条、幽林の伝を述べる前に、

「幽林の長子次右衛門、また貞助といふ。次右衛門は少くして江戸に出で幕府御広敷添番、大沼又吉といふものの養子となつた。号を竹渓といひ詩を善くした。今日世人の尚記憶してゐる詩人大沼枕山は竹渓の子である。」という記述があるが、『下谷叢話』ではここで初めて竹渓・枕山の名が出る。

『下谷のはなし』は章を改め、幽林の四子を紹介した後、

わたしは先幽林の長子竹渓次右衛門が何故鷲津家を

継がなかつたか。其の江戸に出でたのは何歳の頃であつたか。そして大沼氏の家をついだ事情の何であつたかを知らなくてはならない。然し平生疎懶のわたしは此等の穿鑿を敢てする力を欠いてゐる。わたしは大沼枕山の後裔の下六番町に在るを探知し、赴き訪うて、僅に其塋域の三田魚籃坂上薬王寺にあることを知り得たに過ぎない。

として、展墓のことに移る。

『下谷叢話』は幽林の四子を挙げ、竹渓が大沼氏を襲ったこと、その子が枕山であることを述べ、

菊池桐孫の五山堂詩話巻の九に「竹渓、源ノ典、字ハ伯経、尾張ノ人ナリ。今幕府ニ給仕ス。傲骨崚嶒、詩ヲ論スルコト尤精厳ナリ。人多ク指摘ヲ蒙ル。余騒壇ニ相逢フ毎ニ隠トシテ一敵国ノ如シ」云々。と言つてある。わたくしは鷲津氏の家系を討究して偶然大沼竹渓父子が鷲津氏の族人であることを知り大に興味を覚え、先その墳墓をさぐり更に大沼氏の遺族を尋ねて之を訪問した。

わたくしはわが外祖父鷲津毅堂のことを述ぶるに先立つて、しばらく大沼竹渓のことを語るであらう。竹渓は晩年下谷御徒町に住した。その男枕山は仲御徒町に詩社を開き鷲津毅堂も亦その近隣に帷を下して生徒を教へた。わたくしが此の草稿を下谷叢話と名づけた所以である。

と続け、ここで章を改めて、展墓のことに移る。『五山堂詩話』巻九は、右の引用個所の少し後で、幽林について述べる。『下谷のはなし』はそこをも合わせて、幽林伝の条で同書を引いている。

②は前掲論文で竹盛氏が指摘した点であるが、両作冒頭部分から読み取り得る改作の意味は、史料の充実と記述の整理・客観化のみではない。

『下谷叢話』は、①の変更によって作品冒頭で執筆の動機・目的を明示した。また、③によって竹渓・枕山についての記述を一個所にまとめ、毅堂伝と並ぶ作品の中心であることを明示した。

『下谷のはなし』が執筆の動機・目的や枕山の位置付けについて語るのは、第二回目の掲載、「六」にいたってである。「わたしは初この「下谷のはなし」と題した草稿に筆を把りかけた時には、わたしの外王父なる毅堂鷲津先生の行実についてわたしの聞知する事のかぎりを記述し、将来「下谷の家」を継ぐべき年少の子弟に示さん事を欲した」こと、「古老の口に伝へられた家乗の湮滅」が、震災後特に懸念されることが動機・目的として挙げられる。枕

山については、

下谷竹町の鷲津家に在つた文書は、わたしの借覧を許された系図がわたしの家に残つたのみで、その他は悉く烏有に帰した。今鷲津毅堂の伝を編年体に綴り行くことは困難である。わたしは「枕山詩鈔」の編年体なるを基として、これに拠つて毅堂の行実を記述しようと思つてゐる。枕山は毅堂の従祖父（いとこおぢ）である。二家もとより宗族の親誼あるが上に、弘化以後倶に下谷に住し其交遊は亦頗頻繁であつた。されば二家の一を除いて独り一家の伝をつくらん事は却て不可能であらう。

と位置付ける。

『下谷のはなし』は「将来「下谷の家」を継ぐべき年少の子弟」を読者に想定する。これに比べると『下谷叢話』が冒頭で示す、震災で失われたものを記し留め、「災禍の悲しみを慰めやう」という動機・目的はより一般性を持ち、開かれていると言える。また、『下谷のはなし』は、枕山が、「下谷の家」について記すべき作品の中心的な位置を占めることについて、いささか苦しい釈明をしているように見える。これに対し『下谷叢話』はごく自然に枕山を作品の中心として、毅堂と並立させている。

作品の枠組みに関するこうした記述が、冒頭に移されたことも踏まえると、『下谷叢話』への改作は、明確な構成意識のもとに成されたのだと考えられる。それは『下谷のはなし』以上にはっきりと、枕山を作品の主要な要素として位置付けようとするものであった。

三

『下谷のはなし』「十六」では、弘化三年江戸に出て来た毅堂の居所について次のような推測を行っている。

わたしはこゝに毅堂が両夜相ついで枕山と飲んでゐる事から、毅堂は昌平黌寄宿寮の類焼した後枕山の家の近くに寓居したのではないかと思ふのである。此の想像に一歩を進ましむれば、毅堂は枕山の家か或は大沼治郎左衛門の家に寄寓してゐたのではなからうか。鷲津と大沼とは親戚の間柄である事を思へば此の想像はさして所以（いはれ）なきものとは云はれない。

また、「十九」では、嘉永三年『聖武記採要』出版に対する幕府の追及を逃れるために一時房州に潜伏したことについて、

わたしは毅堂が潜伏の地を房州に選んだのは枕山の言ふ所に従つたのではないかと思ふ。房総の素封家にして詩文を好むものは天保九年以来多くは枕山を師となしてゐたからである。

という推測を行っている。

竹盛氏はこれらについて、「「血縁性」を強調することで、つまりは親戚づきあいをさせることで」、毅堂伝と枕山伝の分裂を回避しようとしたとする。そして、これらの推測個所が改作後削除されたことについては、主情的で性急な記述が避けられるという改作全体の傾向に沿ったものであり、「毅堂そのもののとらえかたには、初稿と改作との間にそれほど距りがあるとは思われない。」とする。

しかし、二個所の推測が、毅堂と枕山の間にある懸隔を埋めるものであったならば、逆にそれらを削除することは、両者間の溝を容認するということにならないであろうか。

『下谷叢話』第十四には、枕山と梁川星巌の関係についての考証があり、両者は師弟関係にあったのではないと結論付けている。『下谷のはなし』にはなかったこの個所について塩崎文雄氏は、勤皇イデオローグとしての一面を持つ星巌との関係を希釈し、枕山の周辺から政治性を除去しようとする「不在証明」だと指摘した[四]。毅堂についても同様の処置が成されたと考えてよいだろう。

また、次のような変更も、「毅堂そのもののとらえかた」の変化を示している。

『下谷のはなし』「二十」では、嘉永四年藩校教授として結城に赴任していた頃の毅堂について、

毅堂の家を継いだ鷲津精一郎翁の談話に、毅堂先生は若い頃には評判の美男子で白井権八と綽名せられた位であつたといふ。わたしはこの話を聞いた後聴水簃襍吟の中にある「嬾下将二風貌一漫相待上。宋玉已非二年少時一。窗外短籬三四尺。不レ妨鄰女日来窺。」の一首を誦して多大の興を覚えた。詩中に宋玉が登徒子好色賦を引いてゐる所を見れば、作者が東家の女には見向きもしなかつたことは言ふに及ばない。然し当時毅堂は年二十七歳の美丈夫であつたとすれば艶しい風説に煩はされた事は事実であらう。

と述べる。毅堂先生とて色気と無縁でなかったことを伝える面白い逸事である。

『下谷叢話』第二十では、この個所は削除されるが、鷲津精一郎の談話は第四十で利用される。

第四十はまず中根香亭『天王寺大懺悔』を引く。『天王寺大懺悔』は「天王寺墓地に埋葬せられた名士聞人が夜半墓より顕れ出で毘沙門天を相手に各々生前の事を語るといふ諷刺の文」。毅堂も登場し、かつては貧窮したが、維新後「司法省へ召し出され判事となつたが病み付きでわる気でもないが（略）夫より身分の進むに従ひ居は気を移すといふでもないが何だかやたらに高ぶりたくなりましたゆ

る、昔の友人が尋ねて来てもしびれの切れるほど待たせて置きやがて襖を左右へ開かせて静にねり出しなどしました。」などと語る。続いて、やはり毅堂がかつて貧乏であったのに、「後には大層工面をよくし」高価な書画を購入したりしていたことを伝える香亭の書簡を引く。その後の個所に次のようにある。

毅堂は小柄ですこし前へかゞんで歩むくせがあった。面長で額は広く目は大きく眉は濃く、壮年の頃には白井権八と綽名をつけられた程の美男子であった。そして言語には尾張の国訛がなく純然たる江戸辯であつたさうである。三嶋中洲のつくつた碑文にも「君ハ龐眉隆準、孱然虚弱、容ハ常人ヲ踰エズ。」としてある。

毅堂が晩年人より往々倨傲の誹を受けたのは全く故なき事ではない。毅堂は猪飼敬所の門人で三礼の攻究に最も力を尽した学者である。その平生に於ても辞容礼儀には極めて厳格で毫も之を忽せにしなかつた。之に加るに毅堂は其の性として世の汎交を好まず従つて雑賓を迎へなかつたのみならず、偶徼幸者の来つて其門に遊ばんとする者に対しては断乎として之を退けた。学者にして斯の如き性行を有するものは往々誤つて辺幅を修るものと見做なされやすい。

『天王寺大懺悔』の引用は、前田氏が、毅堂への違和感・反発の表れとして指摘したものである。これに続く右のような文脈に置かれるとき、白井権八ばりの美男子だったという逸事は、ある種の嫌味を伴ってしまうのではないか。「毅堂が晩年」以下の記述も前田氏が指摘したように、言い訳じみた「何となく奥歯にもののはさまったていの物言い」に見える。

やはり毅堂のとらえかたは、改作前後で変化しており、『下谷叢話』ではその俗物性を露わにされている。

前田氏は、『下谷叢話』の毅堂についての省筆と、春濤についてのそれが、ともに彼らの俗物性への批評を含む点で同質であるとした。春濤に関わる記述を更に仔細に見てゆくと、改作による変更にも、毅堂の場合と同質のものが見られることに気付く。以下そうした例を三つ挙げる。

①『下谷のはなし』「十一」、天保十年の条に、

此の頃尾張の森春濤は一ノ宮の家に帰つて時々丹羽村の鶯津益斎を訪うた。「呈益斎鶯津先生」の作に「宅不三遷孟母賢」と云つてゐるから此年益斎の母は猶健在であつたと見える。夏も秋近くなつた頃、春濤は谷文晁の描いた蘆花夜月図を観て江戸に在る枕山の事を思出して、「写出蘆花古武州。欲将相憶問浮鷗。

吾妻橋外月如水。一紙書来新雁秋。」の二十八字を枕山に寄せた。文晁の画は向嶋の景を描いたものであつたらしい。春濤は此年二十一歳である。

とあるが、『下谷叢話』第八は「夏も秋近くなつた頃…描いたものであつたらしい。」を削除する。

②『下谷のはなし』「十二」、天保十一年の条に、

この間に枕山は尾張から森春濤の消息に接した筈である。「春濤詩鈔」庚子の集に「万松亭。読下大沼子寿不忍池観蓮与二星巌翁一唱和詩上。益斎先生使二予次韻一。乃畳韻寄二懐子寿(マヽ)一。」と題して七言律詩七首が載せてある。春濤は一ノ宮の家に在つて医を業とするの傍、詩文の研鑽を怠らず、屢丹羽村の万松亭に来つて、鷲津益斎の教を受けてゐたのであらう。益斎はたまたま従弟枕山の事が話頭に上つた時、嘗て其の贈り来つた不忍池観蓮の作を春濤に示し、之を課題として次韻せしめたものに相違ない。七律七首の一に「次韻限二三日一」と註して、春濤は「三日苦吟才有レ限。百方冥搜句難レ円」と言つてゐる。

枕山の原作は一先の韻を用ひたもので、天保七年、即尾張から江戸に還つた翌年の作である。わたしは既に丙申の条に此の作のある事を述べて置いた。春濤の枕山が五年前の作に次韻するのは少しく時に後れたやうにも思はれる。春濤詩鈔の編年には或は誤があるかも知れぬが、今遽に考ふべき道がない。

春濤はこの年夏より秋にかけて頻に鷲津益斎と賡酬してゐる。九月十五日に益斎が服部子廉其他の門人を連れて、春濤を其居松雨荘に訪うた。

とあるが、『下谷叢話』第九はこれを削除する。

③嘉永四年春濤は江戸に出るが、このときの様子を『下谷のはなし』「二十」は次のように記す。

尾張国一之宮の医師森魯直は此の年郷里を去つて秋の初には既に江戸に来てゐた筈である。春濤詩鈔巻六辛亥の作中に「風雨踰函嶺」の絶句が載せてある。

雨中箱根の関所を越える時春濤は大名の行列の美々しきに比べて独り都門に向ふ身の心細さを思ひ、「長槍大馬乱雲間。知是何侯述レ職還。淪落書生無二気餒一。雨衫風笠度二函関一。」の一首を口吟したのである。

裳川岩渓翁は春濤の門人である。わたしが三番町の間居に岩渓翁を訪ひ先師の事について問うた時、翁は此の絶句を朗吟しつゝ机上の詩箋に之を書してわたしに与へられた。そして此の絶句は春濤をして一時に名を成さしめた壮時の名吟であると語られた。春濤も自

らその「懐人絶句」に枕山がこの絶句を激賞して戯に森雨衫と呼んだことを記してゐる。

然し春濤の名声は猶この時に在つては江戸に留つて帷を下す程には至らなかつた。春濤は未冬の来らざるに先立つて帰途についた。その窮迫失意の状は枕山等に贈つた留別の絶句に言尽されてゐる。「孤剣蕭然百計非。官程秋樹雨霏微。可レ憐季子無二顔色一。一領貂裘又悪帰。」

一方、これに対応する『下谷叢話』第二十は、佐藤六石『春濤先生逸事談』から、毅堂の春濤宛書簡を引用した後、

森春濤はこの年三十三歳。尾張一ノ宮の家を去つて江戸に来り上野山内の学寮に寄寓し、日毎に枕山が三枚橋の家に来つて或は詩を唱和し或は篆刻をなし頻に生計の道を求めたが遂に得るところがなかつた。春濤は失意に加るに瘧を患ひ郷友毅堂の帰府を待ち得ずして悄然として西帰の途についた。事は皆「春濤先生逸事談」に記述せられてゐる。

とある。

①、②に挙げた『下谷のはなし』「十一」および「十二」の逸事は、枕山と春濤の交遊を示すものである。「十二」の方は、『春濤詩鈔』の編年の誤りが疑われているが、「十一」の方は、そうした問題を含んでおらず、文晁の絵を媒介にして江戸の友を思うという、文人同士の友情を伝えるに格好の話柄にも見える。にもかかわらず、両者共改作時に削除された。

③の場合、『春濤先生逸事談』という新資料の出現が変更の大きな動機となっているのは確かだが、その意味はそれだけに留まらない。『下谷のはなし』は、春濤の出世作とも言うべき「風雨踰函嶺」を紹介し、枕山の激賞を得たことにも言及する。その帰郷についても「然し春濤の名声は猶この時に在つては江戸に留つて帷を下す程には至らなかつた」とそれ程悲惨な感じはない。一方、『下谷叢話』はどうか。「風雨踰函嶺」に触れないばかりか、そこには生計の道も立たず、病にまで見舞われ、這々の体で逃げ帰る春濤が描かれている。

ここで『下谷叢話』が依拠している『春濤先生逸事談』は、江戸での春濤について、

横山湖山氏も此の比江戸にありて門戸を張られけるが、枕山氏との間に一時隙ありて交通を絶たれけり、こハ枕山氏、始め星巌翁の門にありしが、仔細ありて其の名を省かれしより起りたる事なり。されど先生（＝春濤、引用者注）ハ文字の交なればとて少しも隔

つることなく枕山氏に親むと同しく湖山氏をも問ひおとづれて折折ハ揮毫など乞はれきとなん。又遠山雲如氏も兼て相識る中なりければ来往絶えず、時に雲如氏上州伊香保に赴かんとて出て立たれければ、先生枕山氏と共に五絶句を唱和して之を送られけり。此の餘藤森弘庵日下部夢香の諸家を問ひ、詩の応酬許多あり。枕山氏の家にて始めて梅痴上人に逢はれける時、上人羅漢の図巻を出して詩を乞はれけるに、枕山氏も其の珍蔵せる王右軍の石像を出して互に真贋など評しあはれけり。先生因て之を合詠して、

（詩省略）

とせられぬ。

と、江戸の文人たちと親しく交わる機会もあったことを伝える。また瘧についても、

（前略）如何せられけん、先生瘧病を煩らひて枕に就かれしかば、枕山氏いたく打ち驚き、様様にいたハり慰められけるに、先生こハ持病にて常に薬を用ゐ侍らず、只何にても神仏に由縁あるもの一つ給ハれ、それにて痊え申すべしといはれければ、枕山氏神棚をあさり、煤付きたる笹団子を買ひもて贈られき。先生之を用ゐられしに、病立ちどころにおこたりきとぞ。今も世に此の病を治するに咒符を用ゐる習慣あり、げにさる事もありけるにや、兎角して六月の下旬になりぬ。

と、枕山との友情をも感じさせる逸事を伝える。

（五）

『下谷叢話』の春濤はその敗北が強調されているのである。

『下谷叢話』では、毅堂も春濤も負の評価を負わされている。また、彼らと枕山との交遊を示す個所が削られ、両者のつながりは弱められている。それは、反俗の文人枕山と、時勢に棹差して成功した俗物毅堂・春濤との対照をより鮮明にするための変更であったと考える。

四

『下谷のはなし』から『下谷叢話』への改作は、新資料による記述の整理・充実だけを目的としたものではなかった。『下谷叢話』は、反俗の文人大沼枕山を描くことに、より比重を置いた作品として構成し直されたのである。そのことは、まず冒頭部分にはっきり表れている。また、枕山の位置が明確になることによって、これと対照的な位置を占める毅堂や春濤の描き方も変化している。彼らはその負の側面を露わにされ、枕山から遠ざけられた。

以上のような意味で、『下谷叢話』が史伝としての形式

と、はっきりとした主題を備えようとしていたのだとすれば、『下谷のはなし』はそこにいたる以前の未定稿に過ぎないのであろうか。逆にいえば、改作によって『下谷叢話』が失ったものはなかったであろうか。

前章で見た、毅堂・春濤に関わる変更はどうか。毅堂の美男子ぶりは、彼の意外な一面を伝える点で面白い話柄であった。春濤が、谷文晁の絵を見て江戸の枕山を思い、詩を贈ったことも、いかにも文人間の友情に似つかわしい。また、「風雨踰函嶺」詩は、詩人森春濤を語る上で無視できない作品であろう。しかしこれらについての記述は『下谷叢話』にはない。改作にあたって『春濤先生逸事談』に依拠しながら、同書が伝える春濤と江戸文人との交遊には触れなかった。

改作で削除された、『下谷のはなし』独自の本文を他にいくつか挙げてみる。

「十三」、天保十二年の条には次のような考証が見られる。

この年の作にはまた「芳坊詞」と題せられたものがある。芳町に在つた蔭間茶屋のことである。枕山は増上寺学寮の僧と相携へて若衆を買ひに行つたのであらう。其詞に云く、(詩省略)

当時蔭間茶屋は芳町、湯嶋天神、芝神明前の三箇処にあつた。茶屋の光景は寺門静軒の江戸繁昌記に記載せられてゐる。蔭間は多く女装をなしてゐたらしい。「窕懲富保(でうくとんぽ)」といふ雑書に「芳町にかげまやあり。男色を売る野郎屋なり。役者弟子奉公人受状にて子供屋多くありて、揚屋は料理屋茶屋にて別の家なり。価一切百疋、昼三分、夜二朱なり。野郎十八九より芸者に出すといふ。又芝居にて女形の役者は平日人数少く、御殿場狂言、或は御姫様の行列なぞには女形多く入用の時、この野郎を雇ひ女形に遣ふなり。其時野郎振袖を著編笠を冠り楽屋入をする。是天明の始も斯くの如しといふ。」

この年十月七日に堺町の中村座が火を失して葺屋町芳町あたりの町家を焼いた。以後劇場は浅草山の宿に移され男色の茶屋はその他の私娼と共に厳禁せられた。世に謂ふ天保の改革である。

この少し前の個所でも目黒の比翼塚についての考証がある。本筋からは脱線気味に江戸風俗の考証が挿入されているのである。

「十七」では弘化四年八月中秋の宴に触れた条で、

たま〳〵わたしは成嶋柳北が遊事の沿革と題する文を草して明治の世の人に向つて審に江戸旧時の行楽を説いた事のあつたを想起した。こゝに其一節を録するの

は決して徒爾ではない。枕山等江戸当時の詩人の生活と情緒とを窺ひ知るに、柳北の記事は最も必要である。

として、成島柳北『遊事ノ沿革』を一頁にわたって引く。

続く「十八」では、嘉永二年、枕山が仲御徒町三丁目に新居を建てたことを述べる条で、

維新以前下谷御徒町練屏小路のあたりには儒者の帷を下し文人の社を結ぶものが多かつた。大正六年沼津の閑居に没した中根香亭は下谷長者町に生れた幕臣である。其の「雅談」に記するところ、読む者をして彷彿として下谷往時の門巷を歩むが如き思をなさしめる。こゝに其一節を録する。

として中根香亭『香亭雅談』をやはり一頁ほど引く。引用個所は下谷一帯に住まった儒者文人の名を列挙し、しかしそのほとんどが既に鬼籍に入ったことを述べた後、

之を要するに諸賢の故宅已に屢主を易へ、面目一変。人得て之を知る無きなり。嗟乎召伯の棠朽枯已に久しと雖も、後の学者其の詩に由りて以て其の人を想ふ。我の此を叙ぶる者、亦未だ此に意莫くんばあらざるなり。（原漢文）

と言う。これを受けてその後には、

わたしが香亭雅談の一節をこゝに引来つたのも其の意は啻に下谷のむかしを想見んが為のみではない。雅談を読みて其の著者が為人を想ひ心旌頗揺々たるを禁じ得なかつた故である。中根香亭の事は餘事に渉るを以て暫く言はない。

とある。

「二十三」は、嘉永七年の春に枕山が「殆累日家を出でゝ観花の興を恣にした」ことを述べる。「枕山が江戸遊楽の詩篇」を「ポールフォールの巴里の景物詩パリイ、サンチマンタル」に擬えたのに続いて、

隅田川の桜花は維新の後に至つても猶三十餘年の間都人のよろこぶ所となつてゐた。わたしは枕山の詩賦を見てたま〳〵墨堤旧時の光景を憶ふやおのづから露伴幸田翁について言ふ所がなければならない。幸田翁は墨江の涯に住して朝暮其風光をよろこび見た最終の名家であらう。何が故に最終と言ふか。其人は尚健在であるが其景は既に破壊せられて存在しないからである。幸田翁が「春の墨堤」と題する文に曰く、

（引用略、約一頁）

長命寺の門外に大沼枕山、鱸松塘、関雪江三人の詩を刻した墨水看花之碑といふものがあつた。わたしは建碑の年月を知らうがため大正十二年震後の冬赴き見るに碑は倒れて砕けてゐた。わたしは砂礫の中に散乱

した二三の破片を拾って家に帰った。

とある。

『遊事ノ沿革』、『香亭雅談』、『春の墨堤』。いずれも『下谷叢話』においては余分な引用であり、削除して冗漫さを解消しようとしたのは当然の処置とも言える。しかし、これらの引用は、明治の初期までは確かに保たれ伝えられていた江戸の文雅を、ある時間的・空間的広がりを持って伝えている。それが柳北らの名文であることも重要である。

一見雑多に見える『下谷のはなし』は、むしろその雑多さ故に、自由に、ある程度幅広く江戸の文雅を描き出していると思われる。『下谷叢話』は、作品の完成度と引き換えに、そうした広がりをいささか失っているようなのである。

おわりに

以上、『下谷のはなし』改作について考えてきたが、ここで最後に前田愛氏の論考「枕山と春濤――明治初年の漢詩壇――」(8)について触れることにする。その中で前田氏は、

荷風の『下谷叢話』は国事に尽瘁する鷲津毅堂と風流に遁逃する大沼枕山と、対照的な二文人の生涯を見事に描き分けたが、この図式はやや趣きを異にするものの、枕山と春濤のばあいに移してみることも可能であろう。

と述べ、同論が『下谷叢話』の枠組みを引き継ぐものであることを明らかにしているからである。

頑ななまでに江戸の遺民としての生き方を保持した枕山と、政府高官に深く食い込み、巧みに時勢に乗じて詩壇の雄となった春濤を、鮮やかに対照させた前田氏の論は極めて魅力的である。いまだにほとんど研究が進んでいない明治漢詩についての数少ない論考の一つである点、近代という時代を問い直そうという問題意識を背景に持つ点でも重要である。そのことはいくら強調してもし足りないほどである。

それでも『下谷叢話』を引き継いだ前田氏の論は、やはり『下谷叢話』と同様の偏りを免れていないように思われる。反近代・反俗の詩人としての枕山に対して、近代に適応し、うまく世をわたった者は、俗人として扱われる。この枠組みによる限り、例えば春濤やその息槐南らは評価の対象となり得ないが、これに代わる新たな視点は提示されてこなかった。しかし、そうしたひとびとの側にも文学はあり、風雅もあったのではないか。彼らが詩人として成功

したのは、単にその政治力・経営能力によるのではなく、詩業そのものの力にも目を向けなければならないのではないか。

もとよりこれは前田氏に対する批判として言うのではない。むしろ前田氏が残してくれた我々の課題である。『下谷叢話』の改作のあとさきを考えることは、明治漢詩研究のあり方を問うことでもあった。

〈注〉

（一）『下谷叢話』執筆の経緯については竹盛天雄「『下谷叢話』縁起――初出から改作へのすじみち――」（『文学』一九六五・九）、塩崎文雄「『下谷叢話』考――鴎外史伝の受容を中心に――」（真下三郎先生退官記念論文集『近世・近代のことばと文学』（真下三郎先生退官記念論文集刊行会　一九七二）に詳しい。

（二）『断腸亭日乗』の引用は『荷風全集』第二十一巻（岩波書店　一九九三）による。以下同じ。

（三）『断腸亭日乗』による。春陽堂版『下谷叢話』本文末尾には「（大正十三甲子年十二月脱稿）」とある。

（四）「『下谷叢話』考（二）――依拠資料の考察を中心に――」（『広島女学院大学論集』一九七二・十二）。

（五）佐藤六石『春濤先生逸事談』は、『文』第三巻第十一、十二号、第四巻第一、四、五号（明治二十二年十二月～二十三年三月）に掲載。引用箇所は第三巻第十二号掲載分。

（六）『前田愛著作集』第一巻（筑摩書房　一九八九）所収。初出時は「枕山と春濤――明治十年前後の漢詩壇――」（『日本近代文学』一九六八・五）。

引用に際しては、原則として振り仮名を省略し、字体は通行のものに改めた。

（ふくい　たつひこ・研修員）